

語

ら

い

座

レポート

座長 松岡恭子（建築家）

17文字の俳句の世界。知っているようで馴染みがうすいこの文学を、女性らしい、心にすっと落ちるかたちで表現してきたやすみ氏。彼女がどんな経緯で俳句をつくるようになったのか、また江戸川柳、古川柳に遡る説明も興味深い。

やすみ氏は全国津々浦々の小学校を訪れ、こどもたちに俳句を教えているという。それは俳句のテクニクを伝えるというより、お題を与えて、それを通して日常をいつもと違う目で見てみようという試み。こどもたちは句をつくるだけでない。名前を伏せて掲示された作品から気に入ったものを選ぶ。そしてそれが誰の作かわかると、そこに新しい人間関係が生まれるのだと言う。心と言葉と人をつなぐのが俳句なのだ。

当日、会場の参加者にも「かくれんぼ川柳」に参加していただいた。ある句の一部分を空白にし、好きな言葉を埋めてもらう遊びだ。恋やお酒や遊びに満ちた空気を全員で楽しんだ。そして皆、やすみ氏のキュートな笑顔とふわふわしたやさしい声に暖かく包まれ、それはまるで師走の晩の魔法のようだったのである。

座長レポート

第7回 語らい座

「ことばの魔法」

ゲスト

川柳作家

やすみ りえ 氏

平成21年12月4日（金）

株式会社大央 大央ホール



不動産会社大央の情報発信スペース「大央ホール」で開催された「語らい座」の第7回目。座長である建築家松岡恭子氏が今回迎えたゲストは、テレビをはじめとする様々なメディアで活躍されている川柳作家のやすみりえ氏。恋をテーマにした川柳が幅広い世代から共感を得ており、多数の公募川柳の選者・監修も務めている。また、文化庁国語課「言葉について考えるワークショップ」では全国各地を巡り、子供たちに川柳作りを通して日本語の魅力を伝える活動も行っている。

師走の福岡。街はクリスマス気分に華を咲かせる中、地下の会場も華やいだ。着物姿のやすみ氏からは、癒しや和みのような清らかな空気が身に染込むように伝わってくる。松岡氏と交わされる言葉や雰囲気から、お二人の仲が伺え、今回は今までと違った会になる予感がした。

■ 川柳作家やすみりえ

川柳作家になった経緯はほんのささやかな出会いによると語るやすみ氏。その出会いは、大学を卒業し、しばらくした頃のやすみ氏に、知り合いの出版社の方がプレゼントした、ある一冊の本。ベテラン女流川柳作家の川柳句集だったそうだ。

< ひっそりと逢って花酔い花疲れ >

< 恋人の笑顔はキープしておこう >

やすみ氏「女性ならではの目線、感性で句を詠んでいて素敵だと思いました。私も作ってみたいと感じました。」

思いつくまま、一人でこっそり詠んでいたと言う。ある時、本をくれた出版者の人が「作っている川柳を見せて」と言ってきたそうだ。

やすみ氏「その時点で100句ぐらい詠んでいて全部見てもらいました。そして、“良いのはありますか、”と聞いたら、“2、3句ありますよ、”と。もっとほめられるかと期待してたんですけど。（笑）」

それでもすごく嬉しかったと語るやすみ氏。次は5句、その次は10句と目標ができたと言う。

松岡氏 「そうやってできた句が注目されることになったんですね。」

やすみ氏「そうです。専門誌に発表されました。そのときに活字になった自分の句を見て“作品、”を作った気分になって、とても充実した気持ちになれました。そしてこういう気持ちをもっと味わいたいと思い、句集を出してみようという新たな目標ができました。」

松岡氏 「結局、川柳の結社などには所属しなかったのですか。将棋や囲碁のように段があるわけではないようですし。」

やすみ氏「そうです。川柳作家ですと名乗って、誰でも自由に活動できますよ。（笑）私の場合はメディアにとりあげていただくチャンスに恵まれ、川柳を始めて早い段階から活動の場を色々といただけて幸運でした。」

今ではあらゆる方面で、公募川柳の選者も務めている。数ヶ月前皆既日食の時に、やすみ氏と松岡氏そして、一茶菴の佃一可氏が招待を受け、種子島を訪れた時のエピソードを松岡氏が語り始めた。

松岡氏 「当日まったく日食が見えなくて。（笑）天気も悪く多くの町民の方々と公民館に閉じ込められちゃったのですが、そんな中、佃さんが煎茶を入れて振舞ってくださったのです。それが、じめじめした気分をほんとにさわやかにさせてくれて。するとやすみさんが“みんなで川柳を詠みませんか！”と言ってくれました。少しのレクチャーと紙と鉛筆だけで、大人から子供までみんなで楽しめる時間が持てました。川柳はどこでも楽しめる、そして誰でも参加できることに心からすごいなと感じたのです。」

■ やすみりえの作品を通して

やすみ氏を知るために、松岡氏がやすみ氏の自作の句を紹介していく。テーマを「恋の句」「はじまりの句」「街・空間」と決めて、やすみ氏に選んで持ってきてもらったようだ。

恋の句 < 咲いてまた逢いたい人の名を想い > （りえ）

やすみ氏 「普段はあまりあれこれと句を説明しませんが、今日は特別お話ししますね。説明しすぎると受け手のイメージ、想像力に邪魔をしてしまいそうで。（笑）咲いてと言えば色々なお花を思い浮かべるとはと思いますが、私はさくらでした。“また”とつけることで繰り返し咲くさくらのイメージを深めています。場所は私の大好きな京都の円山公園のさくら。毎年そのさくらを見ると思い出す大切な記憶を詠んでいます。」



川柳の説明をされるやすみ氏

恋の句 < 一点が滲んで恋になりそうで > （りえ）

松岡氏 「すごく和を感じますね。“滲む”、“境界がぼやける”、そんな美しさは日本らしいですね。」

やすみ氏 「恭子さんがおっしゃるようにイメージは真っ白な紙に一滴墨が落ちた感じです。ただ落ちただけでなく、滲んでいく、取り留めなく進んで広がっていく、そんな恋の始まりの瞬間を読んでいます。自分でもどうしていいかわからない、戸惑いの恋心ですね。」

はじまりの句 <しあわせになりたいカラダ透き通る> (りえ)

やすみ氏「部屋で寝転んで、あ～幸せ～って思って天井を見上げていたら、なんだか天井が透き通って青空が見えた気がしたんです。幸せになりたいって願う気持ちってきっとこうやって透き通っていくんだなと思って詠みました。句を詠む時って、鳥の目線のように俯瞰で見ることがある。この句はそういう雰囲気もありますね。透明になっていく自分を客観的に見ているようです。」

松岡氏「客観的な目を持って表現をすることで、心をうごかすことや何か影響を与えることが生まれるのだと思う。私達はそれをデザインというのかもしれない。それは、一筋に自分のつくりたいものを純粋に追いかけるアートとはまた違うアプローチなのでしょうね。」

はじまりの句 <はじまりのやさしい風を知っている> (りえ)

やすみ氏「風のはじまりはどこからなのだろうと、いつも疑問に思うことがあって。(笑)だけど、そんな風のはじまりを一つぐらい決めていような、自分がその風を生み出せるような瞬間に立ち会えたらいいなと思い、願いを込めて詠みました。」

街・空間 <この道と私を忘れてもいいよ> (りえ)

やすみ氏「この“道”は、故郷の神戸異人館通りの急な坂道が背景に広がります。神戸は震災で町の風景が変わってしまった所もあるのですが、この句に触れるとその懐かしい風景が思い出されるんです。川柳を詠むことは、記憶を辿ることでもありますね。ただ楽しいだけではなく、そういう思い出も残していきたいなと思っています。」

松岡氏「物が無くなっても、思いやそのときの気持ちを残すことが出来るって素敵ですね。」

街・空間 <ドアスコープ決めないでおく間柄> (りえ)

やすみ氏「空間というイメージで作品を思い返したとき、はじめに浮かんだ句です。覗いている時の相手との距離感や、覗いた中の歪んだ世界がおもしろいなって思うんですね。」

松岡氏「覗かれている方は無防備だし、開けるも開けないもこっちで決められる。(笑)一方的な目線がまた面白いですね。」

■江戸川柳のはなし

江戸時代、当時は川柳と言わず「前句附」と読んでおり、五・七・五の後に七・七と続く、その七・七がお題として出され、それに続くように前句(五・七・五)を詠むのが遊び方であったようだ。宝暦7年今から約251年前に、柄井八右衛門川柳がその前句附の公募の選者をはじめた。

やすみ氏「当時、川柳さんは投句料をいただいて興業としていたのです。他にも江戸には20人ほど選者がいたそうですが、人気NO.1は川柳さん。それは共感を得る句を拾い上げる目利きの力があったから。みんな川柳さんに選んで欲しかったんですね。」

松岡氏 「以前どうして短歌でなく川柳なんですかと質問した時に、すごく腑に落ちる答えが返ってきたんです。それは“七 - 七を付けると少しくどさが出る。ここまで言わなくてその手前で止めたい。”という答えでした。確かに七 - 七を付けた方がより完結するのですが、その手前でとめた方が、余韻があったり余白が現れたりするんですよね。」

やすみ氏 「そうなんです。私は結構曖昧なことも趣があって好きで、白黒はっきりしないことで余韻を感じたりします。一方で、17音ですっきりと言い切ることも出来るのが川柳。どちらも選べるこの文芸に魅力を感じています。紹介した句からもわかるように、これは失恋だったのか、今でも思いが続いているのか、七 - 七が無い部分が、余白を生み出します。」

松岡氏 「日本の文化は、やや手前で止めるってところがあって、つくりこみすぎないのだと。日本の美だと思いますね。」



対談中のやすみ氏と松岡氏

■ 古川柳の紹介

江戸時代に詠まれた川柳を古川柳ともいう。その幾つかをやすみ氏から紹介された。

< 紙びなはころぶ時にも夫婦連れ >

やすみ氏 「紙びなということで、庶民ですね。豪華ではないけれども、季節の節目をささやかに祝いたい気持ちがよく詠まれています。そして、まだ寒いだろう春風に一緒に倒れる可愛い紙びなと、日々の貧しい生活の中でも夫婦一緒に乗り越えて行く自分たちの毎日を重ねているのでしょう。」

< 国の母生まれた文を抱き歩き >

やすみ氏「携帯の写真ですぐに生まれた赤ちゃんのお写真が送れる今の時代では詠めない句かも知れません。」

< 薬喰い人目も草も枯れてから >

やすみ氏「“薬喰い”とは寒い時期に栄養がつく物を食べることなんですね。それは例えばお肉なんですが、むしろ贅沢ではばかれる、四つ足の動物をおおっぴらに食さないといった風潮があったのです。そこでお肉を“栄養のための薬”とする大義名分を打ちたてて、食べたいお肉を食べていたようです。草木が枯れる時期、人目を避けるようになどといった言い回しが、とても上手ですね。」

< 子が出来て川の字なりに寝る夫婦 >

やすみ氏「“川の字に寝る”という表現はこの句から人々に広まっていったと言われます。この句は非常に家族の温かさを感じますが、もう一つの背景としては、旦那さんが子供に奥さんをとられた、そんな皮肉もあるのではとされています。」

松岡氏「これこそ七 - 七を後につけて聞いてみたいですね。どちら側で後につなげるかまったく違うでしょうね。（笑）」

■ 子供と川柳

文化庁の国語課が「言葉について考えるワークショップ」を全国各地で始めてから数年。その講師としてやすみ氏も参加している。他に俳句、短歌、詩の先生、朗読、演劇のシナリオなど様々な人が参加している。それぞれの分野で子供たちと言葉について授業を行っているそうだ。

松岡氏「子供たちの反応はどうですか。」

やすみ氏「生き生きしていますよ。すごくおませさんもいますね。（笑）みんなで川柳を作るんですが、恋の句もちらほら。例えば、“わたしとねわたしと笑う彼が好き”（笑）小学校3、4年の女の子の作品ですよ。」



対談中のやすみ氏と松岡氏

時間を競うのではないことや、いつもの目線から少しずらして物事を見ることなどを、一緒に体験しながら伝えているとやすみ氏は語る。

やすみ氏「考えた句を出し合って終わりじゃないんです。子供たちの作ったそれぞれの句を模造紙に張り出して、みんなでそれを鑑賞して、自分の好きな句を選ぶんです。そうすると実は喧嘩している相手が詠んだ句であったり、好きな子が詠んだ句であったり。そうすることで、間に何かを通してではなく、純粋な状態でその人のことを知ることが出来るんですね。」

松岡氏「とても素晴らしいですね。人を評価する目と自分の心がつながっていく瞬間を感じるんですね。国語の先生に喜ばれないですか。」

やすみ氏「学校の先生はほんとに忙しいんですね。だからこういう試みは先生方にとっても、新しい事に児童と取り組める時間になるようで喜ばれますね。」

言葉について考えることは決して子供たちばかりに向けた話ではない。心や思いを伝えることや自分を見つめることが、あらゆる状況に深く根付いてほしい。ささやかな自身の心の動きを楽しむことが出来ることほど贅沢はないだろう。

■ かくれんぼ川柳

最後に会場の皆さんに紙と鉛筆が配られた。ますの空いた川柳がスライドで映されるので、その虫食い部分を言葉で埋めるというものだ。「虫食い川柳」と言わず「かくれんぼ川柳」と言うところが、やすみ氏らしくて楽しい。それは決して答えあわせではない。やすみ氏の話を知っていると不思議と川柳を詠みたくなったのは私だけではないだろう。お題に取り組むみなさんのお顔には、心なしか笑みが浮かぶ。
お題は次の三つだった。

美しいリボンが□にかけてある

真っ白な□□□に落とす恋ごろ

お茶がわりなどと嬉しい□が出る

会場からの様々な思いを込めた完成の句を、やすみ氏と松岡氏から紹介された。それは笑いもあり感動もありで、言葉と戯れるそんな楽しい一時となった。素敵な時間としてくださったやすみ氏の今後の活動にも注目していきたい。

(答 罨 すき間 泡)